

滋賀の都よ いざさらば

嶋 昭 紘（動物）

昭和58年9月1日付で、滋賀医科大学放射線基礎医学教室から、古巣の動物学教室放射線生物学講座の江上信雄先生のもとへもどってきました。7年半の空白のため、スムーズに反応できないことも多かろうと思いますが、よろしくお願いします。

滋賀医科大学は、国の無医大県解消政策にもとづいて昭和49年10月、滋賀県大津市に開学し、翌50年4月に第一期生100名を迎えました。私は51年4月に、放射線基礎医学教室の助教授として、本郷から赴任しました。その当時すでに大津市に建設中の本校舎の完成が大巾に遅れており、仮住いが長く続き、研究は完全に中断しました。最大の理由は、琵琶湖は近畿の水ガメなので、大学から出るすべての汚水を大学内で処理しなければ、処理ずみの排水の琵琶湖への流入は勿論のこと、排水管の敷設、ひいては大学の存在そのものすら認めないという、強力な反対運動があったためです。脇坂学長らの努力で、大学敷地内に污水处理施設の設置が文部省により認められ、校舎の建設が急がれました。この污水处理施設は、その後多くの大学や民間会社の手本となった先駆的なものでしたが、運転費として当時で年間三千万円程が必要とされ、文部省からの特別予算に加えて講座新設費や建屋の単価削減等によって、なんとかまかなわれていました。汚水の原点処理という考え方自体は、環境問題に対する一つの有効な対策だと思いますが、滋賀県の場合には、下水道の普及率が数%という特別な事情もからんでいたと思います。

次に手間どったのは、所謂R I施設の建設です。一般排水ですら上のような状態でしたから、放射性廃液をどう処理するか。結局、原点処理の原則

にしたがい、大学のR I施設内で濃縮乾固するという大変な方式を取るようになりました。これにも、文部省の特別な理解が示され、立派なR I実験施設が完成しました。

所謂地方大学にしては、文部省からの破格（と私は思います）の理解がえられたのは、本格的な無医大県であった滋賀県の実情（人口約100万人の県下の医師の数は、私の記憶では950人位）と、琵琶湖という近畿の水ガメの存在によっていたと思います。約4000平方キロの滋賀県の、20%近くの面積を占める琵琶湖は、なんといっても、近畿2府4県のいのちの水の供給源です。同時に、滋賀県を東西南北に分断し、「近江八景」に象徴される多彩な風土を醸しだした最大の要因でもあります。最近、滋賀県は琵琶湖の学際的な研究を推進するために、県立琵琶湖研究所を創立しました。壬申の乱で消滅した大津京以来、有史日本史の表裏を見つめてきた琵琶湖は、私にとっても忘れがたい風土であると思います。

ここで、日本史の教科書にはまず登場することはない話題を一つ紹介します。聖武天皇が平城京へ都をもどされる前のほんの短期間、紫香楽宮（しがらきのみや）を造営されたことは、御存知のかたもあるかと思います。滋賀医大から車で南西に40分程山狭の小径を走りますと、小さな盆地がひらけ、ここに紫香楽宮跡があります。今は礎石だけが残っていますが、ここを訪れる人は殆んどいないようです。この地から、聖武天皇は東大寺の盧舎那大仏造営を発願されたといえます。「紫香楽」は今は「信楽」と書きます。茶道に興味をお持ちのかたは、信楽焼を御存知でしょう。茶器としての信楽焼は、千利休らの恩恵をこうむって、

室町・桃山時代にその確固たる礎を築きました。火鉢や瓦があまり使われなくなった現在は、茶器以外に植木鉢やタイルが主な製品になっていますが、信楽の狸の焼物は知る人ぞ知る名物なのです。狸の焼物が焼かれはじめたのは、百年程前からのことですが、何故狸が選ばれたのかは定かではありません。動物学的にも、うまく説明はできません。一般に狸というと、狸親父、狸顔、狸寝入り、狸婆、あげくは狸の腹鼓などがあまり良い形容詞としては使われていませんが、これはむしろ民俗学的研究の対象として興味あることだと思います。焼物の狸にも、大量生産とはいえ、それぞれ表情があり、ストレスの解消にもってこいといった福

相タヌキも居ます。

滋賀医大に居りました7年半のうち、最初の数年間は殆んど研究室のセットアップ等の仕事に費やしたあと、主として魚類の個体と培養細胞を用いて、エイジングと発癌、DNA修復の問題と取り組みました。また小児科との共同研究として、初代培養細胞を用いた種々の遺伝病患児のスクリーニングもかなりやりました。本郷へ移る少し前から、ヒトとサカナの培養細胞を融合させて、光回復遺伝子の研究も開始しました。滋賀医大での研究成果は、論文として順次公表してゆきたいと思っています。